

エイサー部

対象生徒：エイサー部部員
指導教員：山田哲久・森晴菜

地域連携実施協力者
介護施設、イベント実行委員会様、多賀小学校様

取り組みの概要

私たちエイサー部は結成 13 年目を迎えた。3 年生 1 名、2 年生 7 名、1 年生 4 名の計 12 名で活動をした。平日は基本打ち・パート練習・通し練習などを行い、休日は演舞依頼をいただいた場所に赴いて演舞を披露した。今年度は約 40 回の演舞を行い、内訳としては、熱海市や伊東市にある介護施設への慰問やお祭り・イベントへの参加が多い。また、神奈川県足柄下郡にある介護施設への慰問や、新宿エイサー・川崎はいさいフェスタへの参加など、県外にも活躍の場を拓けている。

演舞の指導については、年に数回指導団体の方に来てもらい教をいただいているが、普段は上級生が下級生を指導したり、同じパートで見比べて教えあいをしたりと、生徒同士でコミュニケーションを取りながら技術向上を図っている。

さらに、大きい声を出して盛り上げることや、笑顔で場を和ませるといった高校生の持っているエネルギーを見て下さる方に伝えることができるよう、練習内容も工夫をしている。

エイサーを踊る自分たちだけではなく、見て下さる方もみんな楽しめるような演舞を披露できるよう、これからも練習に励んでいきたい。



取り組んだこと

- 2019. 04. 13 ATAMI BAY RESORT KORAKUEN
- 2019. 04. 20 第 17 回あたみスプリングマーケット
- 2019. 05. 03 川崎はいさいフェスタ
- 2019. 05. 25 日本マスタース水泳短水路大会
- 2019. 05. 26 伊豆高原十字の園
- 2019. 06. 03 多賀小学校 演劇教室
- 2019. 06. 08 ミモザ熱海湯庵
- 2019. 06. 15 特別養護老人ホームうさみの園
- 2019. 06. 23 静岡県高等学校文化連盟郷土芸能専門部合同発表会
- 2019. 06. 29 湯河原温泉ケアセンターそよ風
- 2019. 06. 30 東洋大学校友会
- 2019. 07. 21 網代ベイフェスティバル
- 2019. 07. 28 新宿エイサー
- 2019. 07. 31 中学校一日体験入学
- 2019. 08. 03 湯河原ゆうゆうの里



2019. 08. 04 夕涼みわくわく市
 2019. 08. 08 熱海海に見える病院
 2019. 08. 24 JC フェスタ 2019
 2019. 09. 07 介護老人保健施設みはらし
 2019. 09. 08 介護老人保健施設のぞみ
 2019. 09. 15 2019 保育子育てのつどい
 2019. 09. 16 中銀ケアホテル
 2019. 09. 22 障害者支援施設碧の園・伊東市重度障害者デイサービスセンターひだまり
 2019. 09. 28 多賀小学校運動会
 2019. 10. 14 あたみ翔裕館
 2019. 10. 19 グループホームうさぎ伊東中央
 2019. 10. 19 今宮神社
 2019. 10. 20 ミモザ湯河原
 2019. 10. 25 桃陵祭校内発表
 2019. 10. 26 桃陵祭一般公開
 2019. 10. 27 熱海ガス
 2019. 11. 03 下多賀町内会
 2019. 11. 03 中野町内会
 2019. 11. 04 ぽっかぽか熱海館
 2019. 11. 23 伊東大田楽
 2019. 12. 15 静岡県高等学校文化連盟郷土芸能専門部第 24 回文化祭
 2020. 01. 18 伊豆スカイライン熱海峠開通式
 2020. 01. 25 ミモザ白寿庵真鶴
 2020. 02. 02 あいら伊豆農業協同組合 下多賀支店



取り組みの成果

(1) 地域と熱海高校エイサー部のつながり

演舞を披露する先々で、ありがたいお言葉をいただいている。時には涙を流して喜んで下さる方もいて、その方々のお言葉や振る舞いが生徒にとってのモチベーションにもつながっている。私たちの演舞がとてもよいという評判が介護施設やイベント担当者の間で話題になっているということを耳にしたこともある。そのおかげか、近年は演舞の依頼数が格段に増えている。エイサー部の活動に理解を得られていることは非常に嬉しいことであり、エイサーを通して地域と熱海高校エイサー部のつながりが多くなっていることを実感する。



(2)主体性の向上

部活動がオフの日でも、生徒が自主練習を積極的に行うようになった。地域に必要とされているという自覚が、生徒たちの行動を変えてくれていると感じる。その行動が周りにいる生徒にも良い影響を与えている。また、こちらから指示をしなくても今の部活動に必要なものは何かということを生徒同士で話し合いをしている場面も見られる。エイサー部での活動を通じて、自ら考えて発信をする・共有をする・行動することの必要性に気づき、それゆえ主体的に行動する力が養われている。



(3)コミュニケーション能力の向上

演舞の指導は生徒同士で行われるため、性別・学年・人間関係といった壁を超えたやりとりをしなければならない。そのときに、伝える側はどのような言葉を選んで、どのような口調を使うべきかを、伝えられる側の気持ちになって話をしなければならない。はじめのうちは、言葉遣いの部分でうまくコミュニケーションを図ることができずに、トラブルが起こることもあったが、一緒に活動するにつれて、物事を伝える側の果たす役割を理解できるようになった。また、演舞のときには外部の方と接する機会がとても多い。そのため、普段から会っている方だけではなく初めて会う方に対して、挨拶や言葉遣いに気を付けて会話することや、他者と積極的に関わる姿勢を身に付けることができた。



今後取り組むべきこと

エイサーの演舞は、生徒、各施設、団体の方々に好評であったため、来年度以降も継続していく。

今後の取り組みとして、エイサーを地域の人に知ってもらう機会を増やす。例えば、生徒が地域の小中学生を対象にエイサー教室を開く。エイサーの魅力を知り、関心をもってもらう。一人でも多くの人にエイサーの楽しさを知ってもらうことで、地域の人と生徒（学校）の交流を活発にし、地域の活性化につなげていきたい。



パソコン部

対象生徒：パソコン部
指導教員：パソコン部顧問

地域連携実施協力者
熱海高校管内の企業

取り組みの概要

これまで、主にタイピング練習と情報関係資格取得に向けての演習を行っていたが、パソコン室という閉鎖的な空間で静かに活動するだけでなく、時には外に出て様々な生活体験をさせることで学校や地域に寄与する態度を育て、自己肯定感や自己有用感を醸成したいと顧問は常々考えていた。

パソコンを中心とした活動を継続しつつも、本校観光ビジネスコース生徒が開発したゼリー・まんじゅうなどの販売活動を通じた熱海高校プロモーションや、地元食材（漁業・農業）を利用した新商品開発とコンテストへの参加や販売、部員の居住する熱海・伊東・湯河原・函南などの地域研究等、幅広い活動をしている。また、「うどん部」や「水族館部」などといった特色ある部活動名に変更することも検討している。

取り組んだこと

【2017 年～】

通学路・海岸清掃と草取り

【2018 年 3 月～】

地元農家と協働してのレモン栽培管理

【2018 年 5 月～】

あいら伊豆農業協同組合監修によるゴーヤ栽培

【2019 年 3 月～】

地元農家の監修によるしいたけ菌打ちと栽培

【2019 年 5 月 28 日】

あいら伊豆農業協同組合と協働してジャンボ落花生の種まき

【2019 年 10 月 24 日】

あいら伊豆農業協同組合と協働してジャンボ落花生の収穫と調理

【2019 年 10 月 26 日】

文化祭で地元商店の取扱商品販売

あいら伊豆農業協同組合監修で育苗した草花・野菜苗の無料配布

【2019 年 10 月 27 日】

国立中央青少年交流の家において地元商店の取扱商品販売

あいら伊豆農業協同組合監修で育苗した草花・野菜苗の無料配布

【2019 年 12 月 14 日】

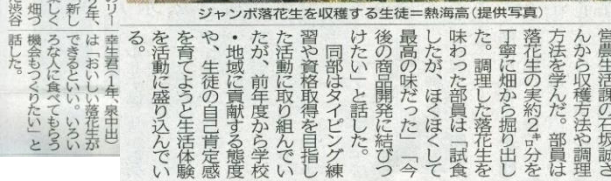
ラスカ熱海において、地元農家から仕入れたレモンの販売

【2019 年 2 月 2 日】

あいら伊豆農業協同組合下多賀支店において本校開発商品の販売

【2019年2月3日】

パン樹久遠社長と新商品開発についての情報交換会



取り組みの成果

(1) 生徒の自己肯定感・自己有用感の向上

中学校時代は二番手三番手で、あまり周りから認められなかった生徒が、様々な生活体験をしたことで、達成感や成就感を得る経験を積むことができた。部員たちで育てた農作物の収穫時や、販売実習での完売時の表情を見るにつけ確実に育っていることを実感した。

(2) コミュニケーション能力の向上

様々な年齢層や各種業界のエキスパートとの交流で、それぞれの立場に応じたコミュニケーションの取り方が上達したと感じた。特に販売実習では、お客様と接する中で自然に身に付いたものも多く、自信につながった。児童や幼児には目線の高さを合わせて平易な言葉で話したり、お年寄りには大きな声でゆっくりと対応したり、専門家の話にはメモを取って質問を繰り返すなど学校以外の現場で身に付いたものが多い。

(3) 学校と地元企業との連携

今年度は総合的な探究の時間でお世話になっている企業や販売実習で知り合った企業主、あいら伊豆農業協同組合と連携できた。企業の方々からは、「今後も高校生と協働したい」、「もっと新しい取組を考えたい」などといった御意見をいただいた。生徒も「視野が広がった」、「プロはすごい」、「もっといろいろ作りたい」など肯定的な感想が多数であった。しかしながら、「熱海は東京圏だからもっと大きな企業と関わり全国規模の商品開発をしたい」、「テレビや県外の企業が熱海を盛り上げてくれている」という声も聞かれ、地域連携や地域貢献を意識していない生徒も存在し、温度差も感じた。

今後取り組むべきこと

地元パン工房と連携し、新商品の開発と継続的な販売を行う。

地元水産会社と連携し、ひもの作りと販売、ういの飼育から養殖、未利用魚の活用と商品開発を考える。

伊豆地区の農家と連携し、本校敷地内の湧水を利用したわさび栽培を実現する。

生徒の保護者と連携し、漬物作りやジャム作りや地域住民対象のパソコン教室など夢は膨らむ。

本部活動は、本校が研究指定校になったことにより、成果を意識して活動しているわけではない。部員が部活動方針を理解し、顧問と対話をしながら活動をより活発にしていきたいと考えている。また、「観光ビジネス部」や「レモン部」など部名変更も意識しながら活動していく。



吹奏楽部

対象生徒：吹奏楽部
指導教員：吹奏楽部顧問

地域連携実施協力者
南熱海第一病院

取り組みの概要

以前は、保育園にてクリスマス演奏、介護施設にて敬老の日演奏、祭りイベントにて演奏、警察署、十国峠イベントなど出演依頼を受け訪問していた。しかし、近年部員人数も減少してしまい、ダイナミックな演奏に欠ける点もあり吹奏楽コンクール出場と校内における式典演奏、野球応援といった限られた演奏機会に縮小してしまう傾向があった。

今年度、南熱海第一病院からクリスマス演奏の御依頼を受け訪問演奏をした。

取り組んだこと

日 時 令和元年12月24日15時～17時
会 場 南熱海第一病院 4階・5階フロア
対 象 入院患者
演奏者 吹奏楽部1・2年生、教職員
曲 目 ジングルベル
聖夜
日本愛唱歌集
君の瞳に恋してる
ハナミズキ



取り組みの成果

(1) 生徒の自己肯定感・自己有用感の向上

日頃、部員の少なさによるモチベーションの低下が否めない状況であったが、観客からの拍手喝采により自信を取り戻した。

(2) コミュニケーションの向上

生徒自らが、現場で打ち合わせを行うことでコミュニケーション能力の育成につながっている。当日、南熱海第一病院担当者および院長とのコミュニケーションを図り、次年度以降の進路選択や吹奏楽部の活動につながった。

今後取り組むべきこと

今回の演奏依頼をきっかけに、生徒の意欲も向上した。4月5日姫の沢公園、4月26日函南ゲートウェイにて演奏を披露する。積極的な活動を試みる。

報道部

対象生徒：報道部部員 3 年生 5 名、1 年生 2 名
指導教員：野田正人・平沢圭子

地域連携実施協力者
三島信用金庫 ほか

取り組みの概要

報道部は「学校応援団」をモットーに、本校生徒の活躍や身近なところでの魅力の発見に努め、新聞を作成している。校内新聞「熱高ニュース」としては校内印刷版を月 1 回、外部印刷業者依頼発行新聞は年 1 回を目安に活動している。さらに高校生と地域をつなぐことを目指し、高校に関わる校外の情報についても記事に盛り込む活動を始めている。

また、地元金融機関、他校新聞部との協働による紙面作成も行っている。これは三島信用金庫が地域創生事業の一環として平成 29 年 3 月に「まち・ひと・しごと新聞」を創刊したことに端を発している。この事業は地元高校生が地元企業の取材と新聞制作を行うことで、高校生に地域への関心を高めてもらうということを目的としている。

本校は平成 29 年度（平成 30 年 3 月発行）版より参加し、令和元年度で 3 回目の参加となる。地元で活躍している優良企業を訪問し、高校生目線での取材を行うことで、地域に根差した魅力ある企業の紹介とともに、地域資源の再確認を促すことにつながっている。

取り組んだこと

1 通常の部活動における「地域とのつながり」

（1）過年度の活動

校内発行新聞および外部印刷業者依頼発行新聞において、地域の出来事を題材に紙面作成をした。後者の新聞は生徒を通して保護者にも配布される。

平成 29 年度は熱海市内の交通事故に関わる記事、および熱海の夏を彩る祭典「こがし祭り」に関する記事を作成した。

平成 30 年度は全国高校総合文化祭長野大会ボランティア部門に出場した本校ボランティア部を取材するために長野県駒ヶ根市まで赴き、地域と密着した活動をするボランティア部の活動を紹介した。さらに同大会新聞部門にも本校報道部が出場・参加しており、全国他県の大会出場者とともに長野県内各所での取材活動を行い、地域の魅力を掘り起こしつつ大会期間中に新聞を作成する大会の取り組みを、校内新聞にて紹介した。他にも、熱海駅前での観光ビジネスコース 2 年生による販売実習や、2 年生全員が参加・実施した夏のインターンシップについて記事を作成した。市内各所の企業・事業所でインターンシップをする様子を紙面で報じることなどにより、地域で地元の人と学ぶ高校生の様子を、他学年の生徒に伝えることができた。

(2) 本年度の取り組み

令和元年度は「熱高ニュース」第 93 号 4 面で「熱海を知る！ 今、熱海は…」と題し、熱海市街に取材に出かけ、地域の様子についての紙面を作成した(令和 2 年 1 月 31 日発行)。年間の観光客数が 3 年連続 300 万人を超え、「熱海の軌跡」と呼ばれる地域活性の回復傾向を見せている熱海市街の実際の様子について取材し、紙面にして高校生に配布することで、地域への関心を持ってもらおうという狙いで実施した。取材先の選定については生徒自身が行った。取材日は 12 月下旬である。

1 つめの取材先は、賑わいを見せる熱海駅商業ビル「ラスカ」である。ビル内の店舗であるかまぼこ屋「丸天」、洋菓子店「住吉屋」のそれぞれの店長と、駅ビル運営会社「ラスカ」の営業課長代理に取材した。熱海駅周辺の活性度は非常に高く、両店舗とも市内外に複数店舗を持つものであるが本店をしのぐ売り上げを見せている状況聞き、肌で感じることができた。

2 つ目の取材先は、熱海への移住相談を受け付けている中屋香織氏である。海岸至近の古い店舗をリノベーションし、レンタルオフィスとして活用している建物で移住相談を受けている中屋氏に話を聞けば、市内の不動産売買の活況などについて把握できると考え、取材した(写真右上)。生徒は、熱海市内は約半数が空き家という状況を伺い、駅周辺の活況とは異なり、活性化している波には必ずしも地域全体で乗り切れていない様子を目の当たりにすることができた。当初の予定では、不動産が活発に売り買いされている様子うかがえたと考えていた生徒たちであったが、高所得者層向けの不動産を除いてはあまり景気が良いとは言えない状況であることが確認できた。



2020年(令和2年) 1月31日 熱高ニュース 第93号

熱海を知る！今、熱海は...

熱海駅における 商店特集

丸天店長に聞く！

「丸天」の店長は、熱海駅ビル「ラスカ」に店舗を構える。今年も大忙しで、お正月の売上も非常に良かった。熱海駅ビルは、駅周辺に比べて、活気がある。特に、お正月の売上は、市内の他の店舗よりも多かった。これは、熱海駅ビルが、駅周辺に比べて、活気があるからだと思う。特に、お正月の売上は、市内の他の店舗よりも多かった。これは、熱海駅ビルが、駅周辺に比べて、活気があるからだと思う。

住吉屋の新店舗は

「住吉屋」は、熱海駅ビル「ラスカ」に店舗を構える。今年も大忙しで、お正月の売上も非常に良かった。熱海駅ビルは、駅周辺に比べて、活気がある。特に、お正月の売上は、市内の他の店舗よりも多かった。これは、熱海駅ビルが、駅周辺に比べて、活気があるからだと思う。特に、お正月の売上は、市内の他の店舗よりも多かった。これは、熱海駅ビルが、駅周辺に比べて、活気があるからだと思う。

熱海の不動産の現状と未来

移住相談者へ聞く！

「移住相談者」は、熱海駅ビル「ラスカ」に店舗を構える。今年も大忙しで、お正月の売上も非常に良かった。熱海駅ビルは、駅周辺に比べて、活気がある。特に、お正月の売上は、市内の他の店舗よりも多かった。これは、熱海駅ビルが、駅周辺に比べて、活気があるからだと思う。特に、お正月の売上は、市内の他の店舗よりも多かった。これは、熱海駅ビルが、駅周辺に比べて、活気があるからだと思う。

空き家と責任

「空き家と責任」は、熱海駅ビル「ラスカ」に店舗を構える。今年も大忙しで、お正月の売上も非常に良かった。熱海駅ビルは、駅周辺に比べて、活気がある。特に、お正月の売上は、市内の他の店舗よりも多かった。これは、熱海駅ビルが、駅周辺に比べて、活気があるからだと思う。特に、お正月の売上は、市内の他の店舗よりも多かった。これは、熱海駅ビルが、駅周辺に比べて、活気があるからだと思う。

インタビューを通して

「インタビューを通して」は、熱海駅ビル「ラスカ」に店舗を構える。今年も大忙しで、お正月の売上も非常に良かった。熱海駅ビルは、駅周辺に比べて、活気がある。特に、お正月の売上は、市内の他の店舗よりも多かった。これは、熱海駅ビルが、駅周辺に比べて、活気があるからだと思う。特に、お正月の売上は、市内の他の店舗よりも多かった。これは、熱海駅ビルが、駅周辺に比べて、活気があるからだと思う。

編集後記

2 三島信用金庫発行「まち・ひと・しごと新聞」

本校報道部が三島信用金庫の「まち・ひと・しごと新聞」事業に参加したのは、平成 29 年度第 2 号からである。新聞作成担当高校については、平成 28 年度は菰山高校写真報道部が単体で取り組み、平成 29 年度からは本校報道部および日本大学三島高校新聞部、平成 30 年度からは沼津東高校新聞部が加わり、4 校で紙面を分担し制作している。

制作のスケジュールは(1)9 月中旬に三島信用金庫からの趣旨説明、参画依頼、(2)10 月初旬に取材企業の選定と企業への取材依頼、(3)10 月末に高校と取材企業の日程調整、(4)12 月末までに企業取材、記事作成、(5)1 月初旬までに取材企業による記事確認・最終データ入稿、(6)2 月末に印刷、3 月 1 日発行、各校の卒業式で配布となっている。企業の選定は、複数社に候補を絞るところまでは三島信用金庫側が、最終的に選考、決定する過程で教員と生徒が関わる形態である。

平成 29 年度第 2 号では、土屋優行静岡県副知事を交えての地域活性化に関する高校生座談会に参加・取材し、記事を作成した(写真右)。あわせて、熱海にある空調設備の設置、メンテナンスを行う企業「平和エアテック」を取材し、観光産業を「裏方」として支える企業の存在をクローズアップした。

平成 30 年度第 3 号では地元熱海の企業 2 社を取材した。熱海をはじめとする伊豆東海岸で港湾土木、護岸建設をしている「青木建設」と、宿泊業の「秀花園 湯の花膳」を訪問し紙面作成した。

令和元年度第 4 号では、伊東に本社を置く運輸業の「伊豆急行株式会社」、熱海を代表するホテル「ホテルニューアカオ」を取材した。「伊豆急行」では伊豆の観光産業発展と歩みを共にしてきた会社の歴史、多様な業務の様子、さらにはどのような人材が求められているかなど、多岐にわたる社員の思いをまとめた。「ホテルニューアカオ」では観光産業から熱海の発展を支えている企業の新しい取り組みや今後の方向性などを伺い、社員を大事にする社風や社是から見える企業風土についての紙面(写真右)を作成した。



取り組みの成果

一般的に言われている言説について、実際に現場に赴き確認することで多様な側面で理解することができるようになったと思われる。例えば、賑わいのある熱海駅周辺と、空き家対策に苦慮している不動産仲介業の実態を知ること、熱海における観光の活性化が地域をあまねく活性化させているわけではないことを、生徒は実地で知ることができた。また、紙面は図らずも、地域の光と影の部分を取り上げた形となり、生徒は物事を複数の側面から見ることの大切さを実感していた。

企業での取材では、全社一斉休館やウォークビズ（歩きやすい格好での出勤を認め、社員の健康増進を図る取り組み）、ほめる文化の醸成のための工夫など、働き方改革への具体的な取り組みを紹介してくれることもあった。現今のニュースで話題となっている事柄が、現場で如何に実践されているかといったことも学ぶことができた。

さらには地域における企業の役割や、地域への貢献についての思いを社長や社員から直接聞くことで、生徒は仕事を通しての自己実現と地域貢献について考えるようになった。

より細かい点を言えば、大人に対する質問の仕方、準備の在り方、メモの取り方から名刺の受け取り方まで、地域に出向き社会人と接することで学校での学びでは実現しにくい社会性の涵養につながる学びの機会があった。ポジティブに生きるための思考方法を語ってくれる経営者もあり、単なる「お仕事紹介」ではない多様な学びの機会となっている。

今後取り組むべきこと

本校生徒はコミュニケーションを不得意とする生徒が多い印象がある。報道部部員も決して社交的とは言えない。が、だからといって相手に対しての配慮より、生徒を社会に出す場面から遠ざけてしまうのは、却って問題であると考え。コミュニケーションが苦手であるからこそ、より実践・実地の機会を増やす。そうすることで少しずつでも改善していくことはある。応対してくださる社会人側にもご理解をいただき、高校生を「地域とともに育てる」意識を醸成していきたい。

そのためにも、地域と結びついた活動の領域を広げ、機会を増やしていく必要があると考える。今後は伊東市域の高校、賀茂郡の高校など、伊豆のより狭いエリアでの魅力発見への取り組みの協同化とともに、広い目から見た地域を意識できるような、視点を変えた地域との取り組みを作り、生徒への学びの機会を設けていきたい。

ヨット部 <網代祭り>

対象生徒：熱海高校ヨット部部員
指導教員：後藤昇太

地域連携実施協力者
阿治古神社護持会

取り組みの概要

本校近くの網代町に、地域の守り神を祭った阿治古神社があり、毎年7月19～21日にかけて例大祭が行われている。20日には、みこしに代わる御神船「両宮丸」を男衆が町内を引き回す。しかし、近年の人口減少にともない、祭りの伝統継承が難しい状況が続いている。そこで、網代町の目前である多賀湾で活動をしている熱海高校ヨット部部員が祭りに参加することで、地域社会への貢献及び伝統継承の一助となっている。

取り組んだこと

7月20日(土)の御神船両宮丸引き回しに、阿治古神社護持会の約60人の男衆に交じり、本校男子生徒8名が参加した。長さ約12メートル、重さ約2トンもある御神船「両宮丸」を、「やーやー」と声を上げながら網代町内を引き回した。沿道では地域住民らが待ち受け、紙で包んだおひねりを投げて大漁と海上安全を祈願していた。



取り組みの成果

両宮丸引き回しは、一日がかりの重労働であったため、生徒は一律に疲労困憊であった。しかし、生徒からは「地元の人と話ができて楽しかった。」との声が聞こえた。今年度は2年ぶりのインターハイ出場が決まった時期であり、地域の方々と普段の部活動について話したり、激励の言葉をいただいた様子であった。

地域の方からは、「若い衆が参加したおかげでとても助かった。」と感謝の言葉をいただいた。元気のあるヨット部部員の参加は、祭り全体を活気づけることに貢献した。

今回参加した生徒8名は全員、熱海市(網代町外)、伊東市、富士市から通う生徒たちである。今回の経験で、生徒たちは普段部活動をしている地域における海と人との伝統的な関わりを体験することができた。また、普段から地元のヨット部の活動を見守ってくださっている地域の方々の温かいサポートを肌で感じる貴重な機会となった。



今後取り組むべきこと

今後も、地域社会の担い手として本校ヨット部として活動を継続していきたいと考えている。しかし、毎年開催日が固定されているため、7月20日が平日となる場合は学校と重なり、祭りへの参加が困難となる(今年度は土曜日開催)。来年度以降平日開催の場合は、学習活動に影響のない形での協力を考えていく必要がある。

生徒会 <こども食堂>

対象生徒：2年・3年福祉類型
指導教員：永吉優里・福田千恵

地域連携実施協力者
寺子屋キッチンスタッフ様

取り組みの概要

2年福祉類型9名と3年福祉類型13名が、子ども食堂を定期的に開催している熱海市内にある寺子屋キッチンへ行き、ボランティアを実施した。

子ども食堂とは、子どもやその親、および地域の人々に対し、無料または安価で栄養のある食事や温かな団らんを提供するための社会活動である。このような、「人が多く集まる場所」が全国的に広がってきている。全国に子ども食堂が増えたことで、全国の貧困に対する意識も変わってきている。

今回参加させていただいた子ども食堂では、熱海市内に住んでいる子どもが来て、一緒に昼食を作り折り紙などで創作活動を行い、ジェンガやけん玉など、昔ながらの遊びを行った。子ども食堂は月に2回、第1・第3日曜日の10時から14時に開かれ、熱海市内に住んでいる子どもたちから近隣住民の人たちも幅広く集まれる居場所になっている。



取り組んだこと

【第1回】

○日 時：7月2日（火）

○参加者：福祉類型2年 源久・小松

○内 容：午前中に昼食作り、午後からUNOやジェンガを子どもと一緒にやった。

【第2回】

○日 時：7月21日（日）

○参加者：福祉類型2年 内山・南 福祉類型3年 田中

○内 容：午前中に昼食作り、午後から怪獣の絵画コンテストに向けて絵と一緒に描いた。

【第3回】

○日 時：9月1日（日）

○参加者：福祉類型3年 草野・鈴木久・羽成・村崎

○内 容：午前中にいなり寿司を作り、午後からはUNOやジェンガを子どもと一緒にいった。

【第4回】

○日 時：9月15日（日）

○参加者：福祉類型3年 小黒・川口

○内 容：午前にお弁当を作り、午後から麦わら帽子のクラフト作成を行った。

【第5回】

○日 時：10月20日（日）

○参加者：福祉類型3年 久保田・鈴木晴

○内 容：クリスマスツリーを作成した。



【第6回】

○日 時：1月19日（日）

○参加者：福祉類型2年 宮原 福祉類型3年 中道・成田

○内 容：午前中にアップルパイを作り、午後からは折り紙で動物を作った。

【桃陵祭 一般公開】

○日 時：10月26日（土）

○実施者：熱海高校福祉類型2年（9人）・3年（13人）

○参加者：近隣に住む子どもたち、授業の一貫で交流活動と一緒にいる多賀小学生

○内 容：午前中には、折り紙でツリー等を作る創作活動を行った。子どもたちは高校生と一緒に楽しく活動した。午後からは、昼食のカレーを無料で提供し、一緒に食べた。また、10円でお菓子釣りをを行い、子どもたちはとても楽しそうだった。販売では、ポップコーンと小田原にある障害者の方が製造した石鹸を販売した。



取り組みの成果

(1) 異年齢同士の関わりを通じた自尊心の向上

子どもといっても、小学生と高校生では学習面や生活をしていく上での知識や能力の定着に差がある。子ども食堂では、高校生がお姉さん・お兄さんの立場から小学生に対して持っている知識や能力を発揮している場面が伺えた。例えば、折り紙を作る時なども本を見て作っていく時に、小学生は本に書いてある通りに上手に折り紙を作ることができなかった。その小学生に対して、高校生は折り紙を折っていく手順を本から読み取り、分かりやすい言葉で説明し、一緒に折り紙を折っていった。生徒の中には、保育士を希望している者もいて、創作活動で小学生が上手く折れなかった時に、子どものペースに合わせて丁寧にフォローをしていた。このような様子から、高校生は小学生に教えることで自分でも人に何かを教えることができる、という自信に繋がったのではないかと考える。

(2) 多様な人とのコミュニケーションを通じた社会性の向上

子ども食堂では、小学生から大人まで参加していて、更に他校の高校生もボランティアとして来ており、様々な年代の人たちとコミュニケーションをとる機会が多かった。生徒は、人見知りの生徒が多く、なかなかコミュニケーションをとろうとしなかったが、子どもたちと一緒に昼食を作ったり、遊ぶ環境を提供することで、徐々に自分から子どもに話しかけようとする様子が伺えた。また、子ども食堂のスタッフさんとコミュニケーションを図る機会もあり、生徒はスタッフさんの指示を聞いたうえで、指示に基づいた行動ができていた。また、スタッフさんが高校生に対して将来のことを聞いた際に、しっかり受け答えができていた。社会人として、指示通りに動くことや、目上の方の質問に対して受け答えができるということは、人間関係を築いていく時に大切になってくる力だと考える。

(3) 学校と地域の連携を通じた学び

学校では子どもの貧困や、子どもの健全育成などの児童福祉の内容を座学で学習する。しかし、座学だけでは、現実にはどのような子どもたちが、どのようなサービスを利用しているのかは分からない。そのため、実際に地域で行われている子ども食堂にボランティアとして参加させていただくことは、生徒にとって学校で学んだ知識を総動員するきっかけになったと考える。

また、スタッフさんや地域住民の方は高校生に対して、生徒の将来に対しての応援の言葉をかけてくださる方が多く、生徒はとても励みになったと思う。地域住民の方々に支えられながら、生活できていると実感できる良いきっかけになったと考える。



今後取り組むべきこと

(1) 桃陵祭での子ども食堂への参加団体や協力団体を増やす

本校の文化祭である桃陵祭で、福祉類型で子ども食堂を継続的に出店していく。その中で、子どもだけが来るのではなく、子どもから大人、高齢の方まで誰でも気軽に参加できる場所を提供したいと考えている。例えば、近くの高齢者施設に入所している方や、地域住民の方々に来ていただいて年代や性別という垣根を越えた交流活動ができることが望ましい。他にも、障害者の作業所で製造されているものを障害者の方と一緒に作って販売して、高校生をはじめ、地域住民の方々に対する障害の理解を促すことができる。このように、多様な人々との関わりを通して、他者理解ができるように計画的に参加団体や協力団体にアポイントを取れるように努めたい。

(2) いきいきサロンと子ども食堂のコラボ企画

福祉類型では、高齢者を対象としたいきいきサロンを熱海高校で実施しようと計画している。いきいきサロンでは、介護予防のために、身体面では体操、認知面では折り紙などの創作活動を行っている。いきいきサロンを利用している利用者様と子ども食堂に通っている子どもたちを招待し、異世代との交流を通して、高齢者は子どもから元気をもらったり、子どもは高齢者の方々から昔ながらの遊びや歌等を教えてもらい、お互いに良い影響をもたらし、意味のある取り組みになってくると考える。生徒が子どもから大人、高齢の方まで一緒に楽しめるような企画を考え、提供できるように計画的に授業計画をする必要がある。

キャリアカフェ

対象生徒：全校生徒
指導教員：進路課職員

地域連携実施協力者
熱海高校管内の企業様

取り組みの概要

3年生が求人票の受付を間近に控えた5月末～6月に、熱海の商工会議所と連携し、生徒と社会人が仕事について語り合い、キャリア意識の向上を図る目的で実施している。3年生のみならず、コース選択を控えた1年生や、就職準備をしている2年生にも参加を呼びかけ、全校生徒誰でも参加を可能にした。

これを機に進路の最終的な方向性を絞る機会を与えたり、まだ進路希望がはっきり定まっていない生徒に考える機会を与えたりする、などの効果を期待している。また、社会人との関わりが希薄な生徒たちが社会人と話す機会を与えられることで、社交性を身に付ける場を用意したいと考えている。

取り組んだこと

従来の進路ガイダンスのような堅苦しい雰囲気ではなく、「キャリアカフェ」という名前が示すように飲み物を片手に気軽に社会人の話を聞く機会を設け、会社のやりがいや勤労観を自由な雰囲気の中で感じられるよう取り組んでいる。

主に管内の以下のような企業を呼んで仕事内容等を紹介していただいた。

【第1回 2019年5月24日】

- ・あいら伊豆農業協同組合 / ・モリボー(株)

【第2回 2019年5月31日】

- ・(株)三ツ星工業

【第3回 2019年6月7日】

- ・(株)ワタナベ電気防災

【第4回 2019年6月12日】

- ・(株)エヌティー倶楽部 / ・(株)キヨミ

【第5回 2019年6月21日】

- ・(株)アシベ商事 / ・かんぼの宿 熱海



取り組みの成果

(1) 生徒の進路意識の高揚、進路希望先の決定

3年生はもちろん、1・2年生も企業様の声を直接聞くことで進路意識の高揚が見られた。具体的には、興味のある職種について自主的に深く調べたり、同じ職種で異なる会社と比較検討しながら進路先を決定する様子が見られた。

また、職業人の生の声を聞くことで「働く」ということについて深く考え、自分の適性や能力についてあらためて考える機会が与えられたようであった。

(2) コミュニケーション能力の向上

キャリアカフェという気楽な座談会のような形で会を実施したことで、生徒も企業側も良い意味で気楽な雰囲気が進めることができた。その結果、普段発言などをしないような生徒の積極的な発言が目立ち、気になったことをすぐに聞いているようであった。初対面の社会人とこのような機会を設けて話をするすることで、生徒のコミュニケーション能力の向上が見られたように思う。



(3) 学校と地域との連携の深まり

終わった後、企業様の声を聞いたところ、「生徒と相互に多くの会話ができて良かった。非常に充実していた。」という声が聞かれた。生徒だけではなく、企業側に立ってこの行事を振り返ってみると、子どもたちの前で話す機会を望んでいたようであり、その機会を設けることができて良かったと思う。普段はなかなか高校生の前で話す機会はないが、地域での様子を報告できる場があることで学校と地域との繋がりが深まっている。

今後取り組むべきこと

2019年度より始めた「キャリアカフェ」であるが、生徒、企業共に好評であったため、来年度以降も継続して実施していく。

今後は、生徒により有意義な職業観を育成させるために、話を聞く前の段階から、ある程度その会社の仕事内容や職種についての知識を有しておき、企業の方と有意義なやりとりができる時間を作り上げたい。



保育介護実習

対象生徒：1年生
指導教員：1年部職員

地域連携実施協力者
熱海市・伊東市内の保育・介護施設様

取り組みの概要

1年生の2学期に、熱海市と伊東市の保育施設や高齢者福祉施設にて、実際の仕事の見学や体験をさせていただいた。

この取組は、仕事の現場を知り、自分の進路について考えることはもちろんのこと、異年齢の人との関わりの中で、相手を思いやる気持ちやよりよく関わろうとする「コミュニケーション能力」を育むための大切な機会ととらえている。この体験実習を通して、相手の気持ちになって考えることや、どうしたら自分の思いをスムーズに伝えられるか、また相手の意図を汲み行動できるか、といった力が育まれることが期待できる。

取り組んだこと

【7月】

受け入れ施設への依頼（紙面にて）

【10月】

受け入れ施設との事前打ち合わせ

事前準備① 保育・介護体験実習 概要説明



【11月】

事前準備② リーダー・サブリーダー決定

各施設において、事前打ち合わせの内容を確認



【12月】

名札作成 最終確認 実習当日

お礼状作成

【1月】

新聞づくり



取り組みの成果

保育実習を経験したことにより、生徒からは、「コミュニケーションの大切さを実感できた」、「笑顔で話しかけることにより、人が集まってくれることがわかった」、「自分の予想以上に園児が楽しんで、喜んでくれて、安心した」などの声があり、人と関わる上で、気をつけることや、自分が人の役に立っている喜びなどを醸成することができた。

幼稚園の先生からは、「熱海高校生が、積極的に子どもと関わっていてよかった」、「言葉は少なくとも、一人でいる園児に寄り添って、遊んでいる姿が印象的であった」などのお言葉をいただき、生徒が積極的に取り組んでいたことがうかがえる。

介護施設での実習では、「利用者さんが笑顔で喜んでくれた」、「利用者さんとたくさん話せて嬉しかった」という声の他、「褒められて嬉しかった」、「実際に車椅子を押した経験がなかったので大変だった」、「施設の方は大変だと思った」など、介護施設での現場の大変さを肌で実感できたようである。

今後取り組むべきこと

挨拶、礼儀、マナーなど大人としてしっかりすることを含め、子どもたちや施設の利用者の方は言葉遣いや表情にとっても敏感なので、笑顔で優しく接すること、しゃがんで目線をあわせること、など、細かく事前指導を行っていききたい。今回は、教職員が主体となって事前打ち合わせを行ったが、生徒たちの自主性を高めるため、自分たちだけで直接施設と打ち合わせをすることを視野に入れて取り組んでいきたい。



① 保育施設より

- *子供たちがすぐに近寄ってきてくれた。
- *子供たちに名前を覚えてもらえた。
- *帰りの挨拶あとに男の子がおりがみで作ってくれたものをくれて嬉しかった。
- *何かしてあげたあと直ぐにありがとう、ごめんなさい、と言ってくれるから偉いなと思った。
- *小さい子に何かしてあげると、普通のことで「ありがとう！」が嬉しく感じた。
- *園児が一生懸命名前を覚えようとしてくれて何回も聞きにきてくれた。
- *たくさんの子が声をかけてくれた。
- *「怒るときはちゃんと怒ってあげることが大事」と教わった。
- *子供がけんかをしてしまったときの先生の対応に感心した。
- *実習が終わって帰るときに、「〇〇君、ありがとう」といわれたことが印象的。
- *先生に保育園の先生に向いてるねって言われたことが嬉しかった。
- *最初は距離があった子にお昼ご飯一緒に食べようと言われて嬉しかった。
- *責任感がついた。
- *子供たちにどう接するのがいいのか分からなかった。
- *一人ひとり対応するのが大変だった。
- *園児が帰ってもやらなければいけないことがあってあまり休憩の時間が少なかった。
- *いろいろな子供がいるので、どうコミュニケーションを取るか迷った。
- *子供たちは難しい言葉などを知らないから簡単にまとめることや、子供たちへの声掛けが難しかった。
- *子供は楽しいことがあるとうかれてけがをしやすいので、そこを守ることが難しかった。
- *「だめだよ！」と言っても1回でなかなか聞いてくれなかった。
- *子供たちが好き勝手やっていて、何をするにも5分くらい怒る時間があって、仕方ないかもしれないけれど言う通りに動いてくれなかったから少し困った。
- *けんかをしてしまったときに、どう対処すればいいのか分からなかった。
- *あれやりたい、これやりたいなど、たくさん言われて、それに対応するのが難しかった。
- *寝かしつけるときに、とんとんするのが難しかった。

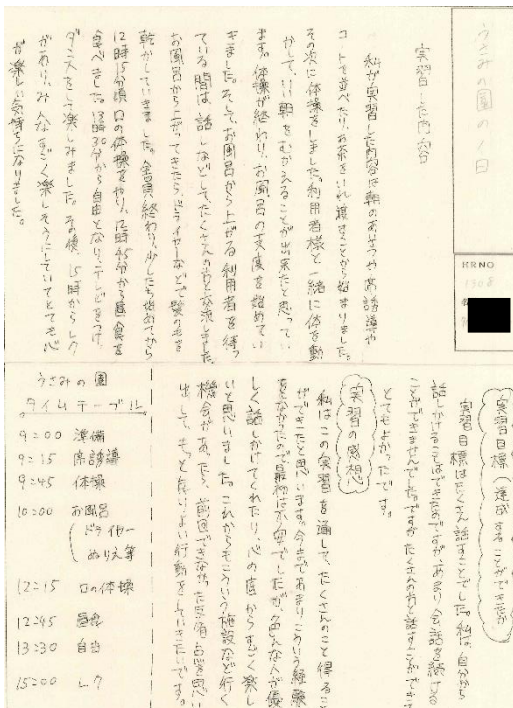
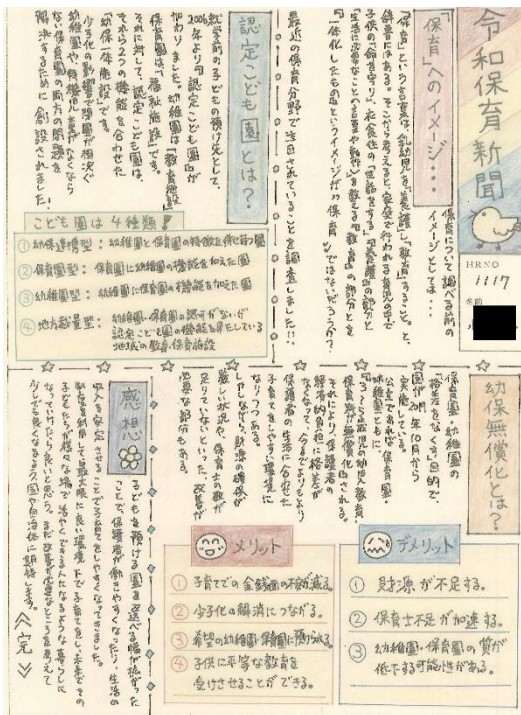
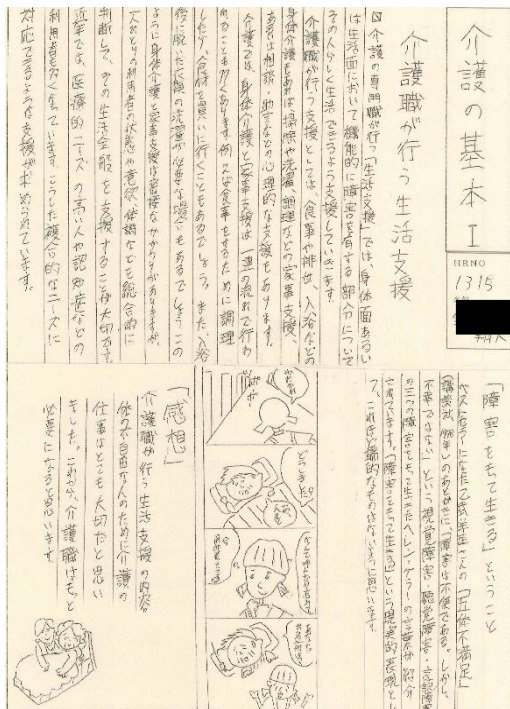
②介護施設より

- *実習することでどんなことが学べるかを知ることができた。
- *自分の住んでいる場所を聞かれた時に私も近くに住んでいたんだよと話しかけてくれた。
- *利用者さんとたくさん話せて嬉しかった。

- *一緒に塗り絵をしていた利用者さんにできあがった塗り絵をもらったことが嬉しかった。
- *利用者の皆さんが思った以上に明るい人たちだったことが印象に残っている。
- *運動器具が本格的だった。
- *職員の人たちは大変そうだったと思った。
- *折り紙を折っているとき、入居者の人が手伝ってくれたことが嬉しかった。
- *利用者の方が笑顔でいてくれた。
- *人が乗っている車椅子を初めて押して緊張した。
- *ほめられて嬉しかった。
- *急に話しかけられた時の対応が難しかった。
- *自分から話しかけにくかった。どう話しかけたりすればいいか分からなかった。
- *お年寄りとどのようなことを話せばよいか分からなかった。
- *話しかけられたり話したりするときの声の大きさが難しかった。
- *利用者さんに話しかけにいくことができなかった。
- *話題をふることができなくて、利用者さんから話しかけてもらっていた。
- *お年寄りとどのように接すればよいか分からなかった。
- *コミュニケーションを取ることが難しかった。



【生徒が作成した新聞より】



インターンシップ

対象生徒：2年生
指導教員：2年部職員

地域連携実施協力者：地域企業様

取り組みの概要

3年生になってから進路を選択しては遅いのではないか、という理由で、1年生における保育介護実習をレベルアップさせ、2年生ではインターンシップを行った。具体的には、昨年度学校に求人を送っていただいた企業を中心に、生徒たち自ら実習先を選び、打ち合わせをして実習を行った。生徒が行った実習先には、地元のホテルや介護施設、幼稚園など様々な企業があった。



取り組んだこと

4月 生徒へのガイダンス、進路希望調査の実施

5月 生徒への、実習先の希望調査

6月 実習先の決定及び調整、教員による実習先への受け入れ可否についての許可取り

7月 生徒による、実習先との電話による打ち合わせ、及び訪問・顔合わせ

※教員による許可取りの段階で、スケジュールが合わず実習の受け入れができない企業があった。そうした場合も、生徒の希望を聞き、実習先が決まるよう手厚くサポートをした。

7月末～8月 インターンシップ本番

9月 お礼状指導、お礼状の送付





取り組みの成果

(1) 生徒が、進路について真剣に考えるきっかけとすることができた

インターンシップを行った2年生は、もともと進路について考えている生徒が多い学年であった。4月に行った進路希望調査でも、自分は美容師になりたい、建築系に進みたい、など具体的な意見が多数見られた。その希望に沿って、生徒たちは自分で実習先を考え、決めることができた。実習中も、企業の方からの指示をよく聞いて、真剣に取り組む姿や笑顔で取り組む様子が多々見られたことは非常に良かったと考える。

実習後に行ったアンケートでは、「挨拶や言葉遣いなどを学ぶことができた」、「働くことの厳しさを学んだ」など、ポジティブな意見が多数出た。また、「今回のインターンシップは自分の進路決定に役に立ちましたか」という問いに対して、「役に立つ」と答えた生徒が9割を超えたため、生徒の満足度は非常に高いと考える。さらに、自由記述欄に様々な意見が寄せられた。具体的には、「自分にこの仕事が向いているか不安だったが、実習を通して自信を持つことができた。」、「職場の方が優しく教えてくださり、楽しく学ぶことができた。」、「自分のやりたいことが見つかった。」など、実習に満足した内容や、将来に向けた内容など、たくさんの意見が寄せられた。一方で、「美容師を希望していたが、実習を通して自分に美容師は難しいと考えるようになった」、「希望していた仕事をすることができたが、予想以上に大変だった」など、進路変更を考えたり、想像と実際のギャップを感じたりする生徒もいた。

以上のことから、インターンシップでは、生徒たちの進路決定にとっても大きな影響を与えるイベントとなったと考える。



(2) 社会に出てから役立つコミュニケーション能力を育成することができた

本校では、国語科や商業科の授業において、電話の応対について学んでいるが、学んだことを実践する機会がなかなかないと考えられてきた。そのため、今回のインターンシップでは、実習当日の持ち物や集合場所・時間などの打ち合わせを、生徒が直接企業に電話をかけた。教員による事前指導は行ったものの、本番になると慣れない口調で企業の方に電話をする姿が見られた。しかし、企業の方が話された内容をしっかりメモしたり、「わかりました」、「お願いします」など、丁寧な言葉遣いをしたりする姿などが見られ、電話応対の実践的な場として非常に有効であったと考える。

また、お世話になる企業に直接訪問をすることで、社会人の方と目を合わせてコミュニケーションを取ることや、礼儀を学ぶ場とすることができたことも、非常に良かったと考える。



今後取り組むべきこと

今回を通して、次年度以降に向けて行うことは2点あると考える。

1点目は、生徒と教員のコミュニケーションについてである。今回実習先は、原則として昨年学校に求人を送っていただいた企業の中から選ぶ形をとったが、本人の強い希望があれば、自分で実習先を探してもよい、というルールを作った。すると、数名の生徒が自分で実習先を見つけ、許可取りから実習本番まですべて自分でやり遂げた生徒がいた。この点は、生徒を褒めたいと考える。しかし、生徒と教員の間で情報共有がうまくできず、教員が生徒の状況を把握することができていなかった。そのため、「実習先にアポ取りの電話をしたか」、「持ち物などの確認はしたか」など、教員が逐一確認することが多々あった。次年度以降は、こういった実習先を自分で探した生徒に対して、実習について逐一教員に伝えられるような環境作りをしていく必要があると感じた。

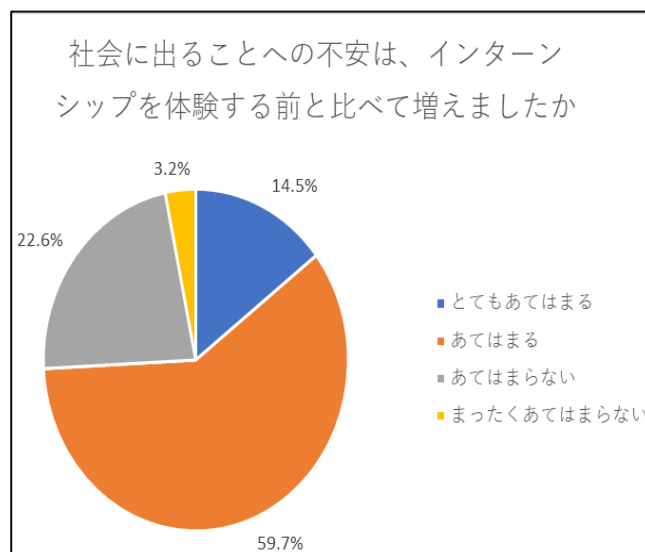
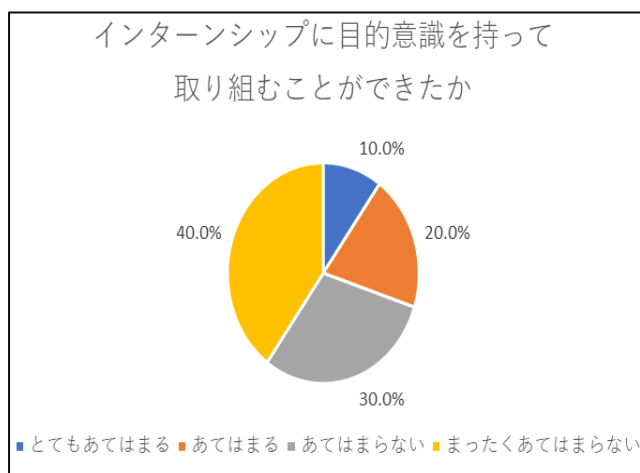
2点目は、生徒たちにメモを取る習慣を付けることである。実習後企業の方から、「こちら話をメモにする習慣が、生徒たちに身に付いていればもっとよかったです」という助言を多数いただいた。社会に出て働くうえで、メモを取ることは非常に大切な能力だと

考える。そのため次年度以降は、インターンシップはもちろんのこと、学校生活のいろんな場面でメモを取る習慣を付けさせるような指導が求められる。

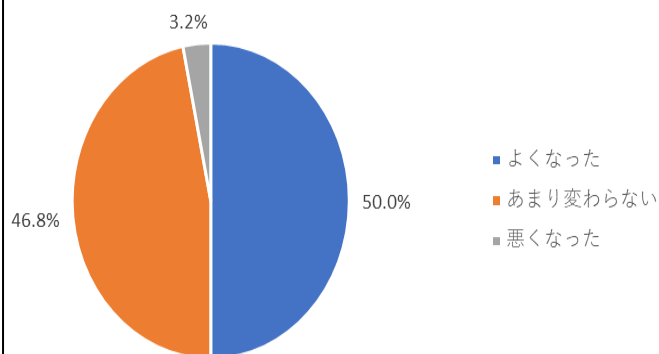
インターンシップは、前述したアンケート結果からもわかるとおり、生徒にとって非常に意義のある活動であった。今回判明した課題について教員間で共有し、次年度以降はよりよいインターンシップが行えるよう工夫をしていきたい。そして、生徒たちの進路意識が少しでも高まり、希望の進路を実現できることを願う。



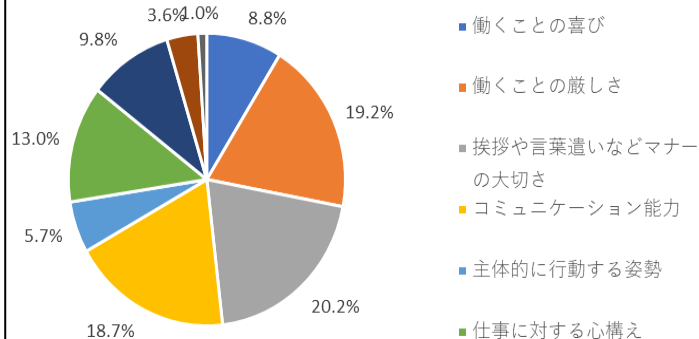
☆生徒アンケート集計



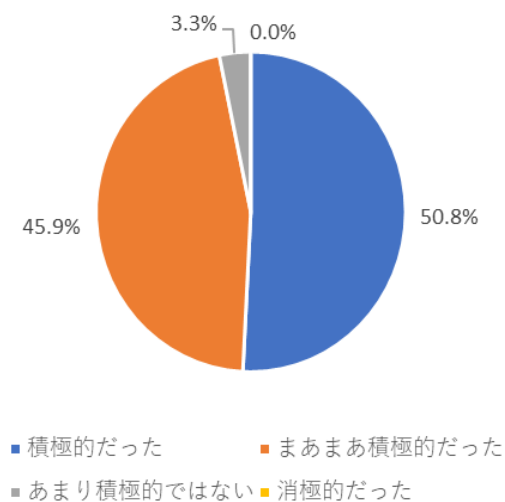
自分が行った仕事（職場）に対し、行く前
と行った後のイメージの変化について
教えてください。



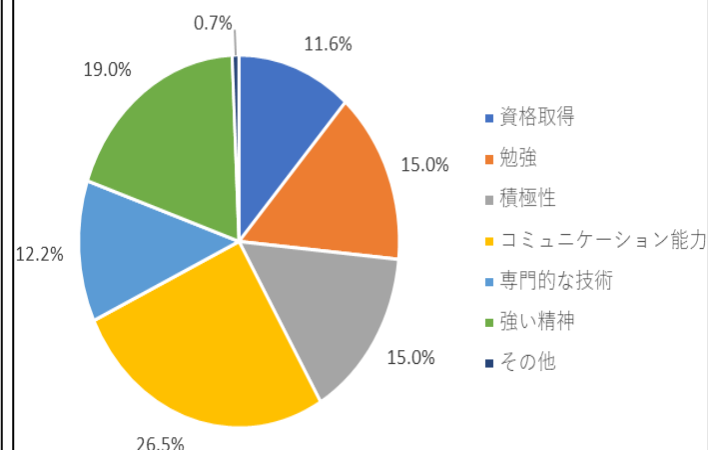
インターンシップを通して身についた
学んだと思うことは何ですか
（複数選択可）



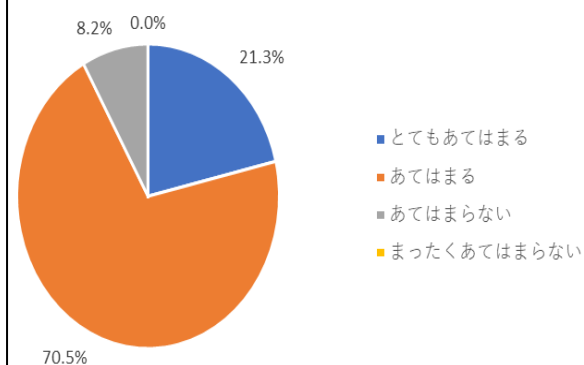
インターンシップ期間中の自分の取り組み
状況について



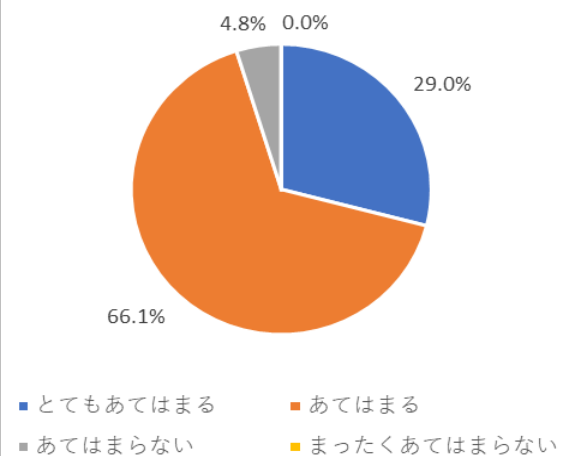
将来社会に出るために、自分に必要なこと
は何だと思いますか



インターンシップを通して、社会人として
求められることを知ることができた
か。



インターンシップを通して、自分は
成長できたと思いますか



アンケート自由記述欄

- ・1日しかなかったけど、仕事のことでなく、あいさつやマナーなど今すぐできることも教えてもらえました。
- ・1日だけでしたが、自分にとっていい経験をすることができた。仕事だけでなく、コミュニケーションの大切さ、あいさつの大切さを知ることができた。
- ・高齢者とかかわりが勉強になった。
- ・広報の仕事ができたが、もう少し踏み込んだ体験をしてみたかった。
- ・働いている人は、いつも時間に追われていて大変そうでした。そして、一人一人のお客様への対応が素晴らしかった。
- ・ほとんど見るだけだったので、次は体験をしてみたいなと思った。
- ・はじめは緊張してお客さんと話すことができなかったが、2日目には自分から接客することができた。
- ・言葉遣いやルールの大切さを教わったので、将来社会に出たら頑張りたいです。
- ・ほとんどの人と話さずに仕事をしたため、もっと積極的に話すべきだったと思う。
- ・お客さんとかかわることができて、実際店を出すとこんな感じだということが分かった。
- ・宿泊客のお出迎えがすごく丁寧でした。ゴルフ場に行ったが時間が足りずすべて回り切れなかった。
- ・子どもが何かをしようとしているとき、すぐに手伝わず見守ることも大切だと分かった。
- ・仕事の厳しさが分かった。(初めてのことで手も止まると注意され、新人でいる雰囲気だった。)
- ・自分と年齢が全く違ってすごく大変で疲れそうと感じていたけど、悪いことだけでなくいいこともたくさんある。
- ・1日だけのインターンシップでもとても濃い内容をやらせてもらうことができて、貴重な体験をさせてもらい楽しかった。
- ・工場と売り場に行ったが、工場で毎日同じ作業をするのがとてもつらかった。だから、将来は工場以外に就職したい。
- ・小さい子供はまだ自分のことが自分でできるわけではないので、しっかりと見守っていなければいけないと思いました。
- ・警察官になるまでの道のりを、職員さんが丁寧に説明してくれた。警察の仕事について理解を深めることができ、良い機会でした。
- ・認知症の患者さんの対応の難しさを感じた。しかし、入浴介助で「ありがとう」と言ってくれてすごくうれしく、看護師という職にやりがいを感じた。
- ・挨拶をしたり、お願いされたことを素早く終わらせることができてよかったです。お客さんがとてもやさしくて、たくさん話しかけてくれて、緊張せずに終われてよかったです。
- ・もっと職場の人に質問などをしておけばよかったと思います。また、仕事がこんなにも大変で、やりがいがあることなのだと知ることができてよかったです。
- ・施設利用者の方とたくさん話すことができた。おむつ替えやお風呂などが大変で少し嫌なイメージがあったが、利用者の方や施設の方と話して、いやなイメージが無くなった。
- ・もっと笑顔になればよかった。

評価開発グループ

担当教員： 評価開発グループ教員

取り組みの概要

本事業の校内グループの1つである「評価開発グループ」が、今年1年どのような取組をしてきたのかをまとめる。評価開発グループの目標は、「地域貢献型人材像」を創ることである。分かりやすく言うと、「地域で活躍できる人材ってどんな人だろう？」を考えそのために、本事業の目指すべき生徒像の柱である「探究力」「主体性」「協調性」の能力を評価するルーブリック評価指標を作成することである。その評価が明確で、本校に適した評価基準になるよう村山功教授（静岡大学大学院教育学研究科）からご指導いただきながら作成を進めている。

育てたい生徒像を掲げたうえで、現在ほどの段階まで力が備わっているのかの把握や、育てたい能力が多面的になっていったため、評価の難しさが浮き彫りとなり、多くの話し合いを重ねながら取組んでいる。

取り組んだこと

① まず、評価指標作成のため、以下の3つのアプローチを考えた。

(1) 教員内での指標作成

「本校生徒のことを1番良く知っている先生たちに意見を聞いてみよう！」

本校の教員研修にて「地域で活躍する人材像の共有（地域で活躍している人ってどんな人だろう？）」「理想とする人物像が高校段階で持つべきであろう資質・能力等についての検討（そんな人になるために、高校時代どんなことをしておけば良いのだろうか？）」「高校段階での資質・能力等の具体的な表れの共有（学校生活での表れ）」を目的とした作業を実施した【5月下旬】。←【1】

研修で共有した意見を、評価グループを中心とした教員でまとめ、「教員が考える地域活躍人材評価指標」を作成する。←【2】

(2) 協力企業内指標の活用

「企業はどういう人材を求めているのか聞いてみよう！」

2年次総合学習である「熱海ラボ」において協力いただける企業様方に「採用後、企業の中で伸びる（活躍できる）人材の把握の仕方」「どういった人材を採用し、どういった人材が昇任していくかという評価の観点」を投げかけ、「地元（企業）が考える地域活躍人材評価指標」を作成する。←【3】

(3) 「地域で活躍する人」の資質・能力の洗い出しからの指標

「実際に活躍している人の特徴を調べよう！」

実際に現在地域で活躍している人物に以下のようなアンケートを取る。

(i) それらの人物が「現在」持っている資質・能力は何か←【4】

(ii) それらの人物が「高校生」の段階で持っていたとされる資質・能力は何か

これらのアンケートを分析し、「地域人材から見える地域活躍人材評価指標」を作成する。

(1)～(3)それぞれの地域活躍人材評価指標を見比べ、それらを元に本校の評価指標を作成しようと考えたわけである。

② 【1】～【4】の作業について

【1】教員研修「地域で活躍する人材とは ～理想とする地域活躍人材像の共有～」

本校の教員研修「本校の強み・弱みとは」「本校生徒の持つ特徴は」「地域で活躍する人材が持つであろう資質とは?」「理想とする人材像と、本校生徒の現状とのギャップを埋めるには」といったことについてグループワークで考えた。



話し合いの結果、理想とする人材が持つべき資質が数多く挙げられたが、特に多かった「主体性」を軸に、多くの資質を以下のように集約することを試みた。

資質1 『自発性』



自ら進んで行動することができる（積極性）、より良いものにしようとする（向上心）、先を見越すことができる（計画性）

資質2 深い学びによる『探究力』



発信力（自分の意見を持ち、他者と意見を交換して考えを述べることができる）、他者との協調性、学力・知識

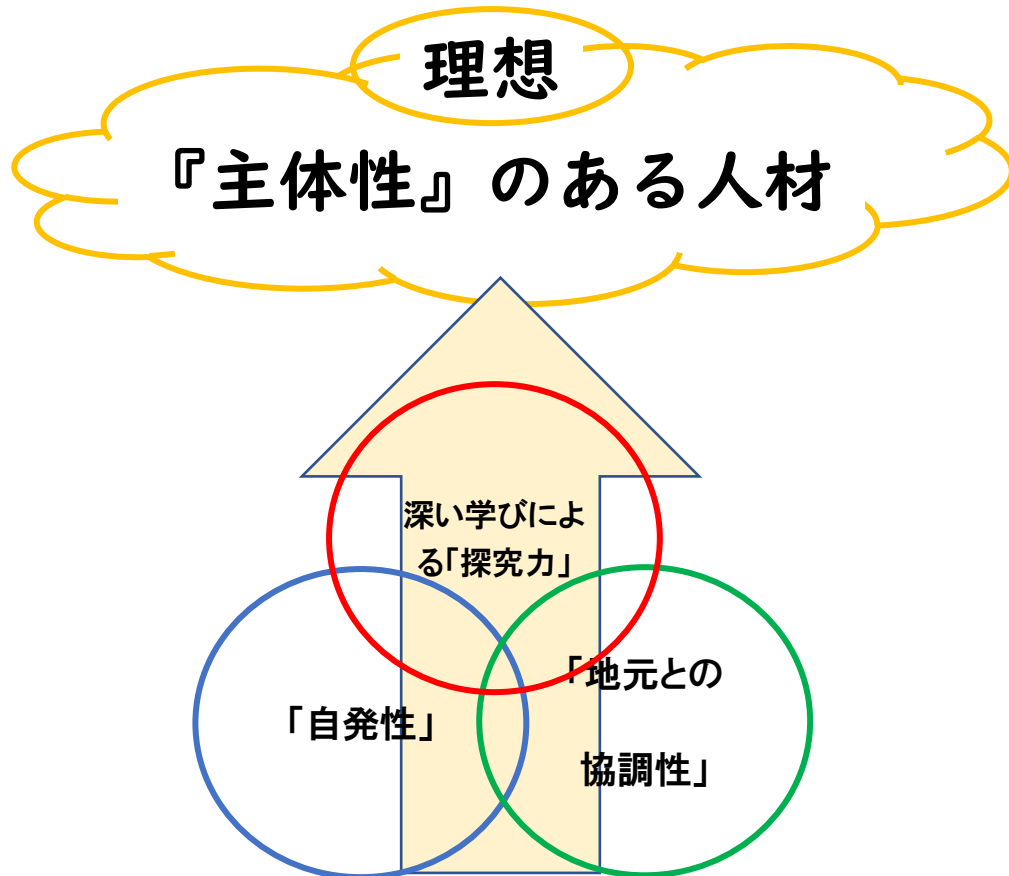
資質3 『地元との協調性』



地元のことを知っている、地元の取組に参加することができる（祭り、防災、地域行事、ボランティア活動、自治会など）

これら3つの資質が相互に関係しあったうえで、より高いレベルの「**主体性**」（**自分の判断によって行動することができる人**）に移行するのではないか、と考えた。

【2】地域貢献型人材の資質の概念図



グループワークの結果、見えてきた地域貢献型人材の資質を育てるために、各教科等で何ができるのだろうかを今後考える必要があると判断し、シラバスに繋げた。→④

また、総合学習（探究活動）での評価基準も作成していく予定である。

【3】地元で協力いただいている方々が考えるもの

9月の上旬に、熱海ラボ協力していただいている企業の方々と懇談し、「社内で評価され、会社内外での地域貢献的活動に積極的な人は、どのような特質があるのか」を尋ねた。

その結果、

- ・問題解決のために動ける人 → 「自発性」
- ・問題をそもそも見つけることができる人 → 「探究力」
- ・他者を巻き込んで行動することができる人 → 「協調性」

などといった回答が得られ、多くの部分が校内研修で教員が挙げた資質と共通する資質となり、非常に興味深かった。

【4】文献からのテキストマイニング→アンケート作成→配布→集計

地域で活躍している方々へのアンケートを作成するため、地域活性化に関する文献を多く読み、その中に出てくるキーマンの行動や思考の特質を可能な限り拾い上げ、テキストマイニングを活用して人材像を作成する。

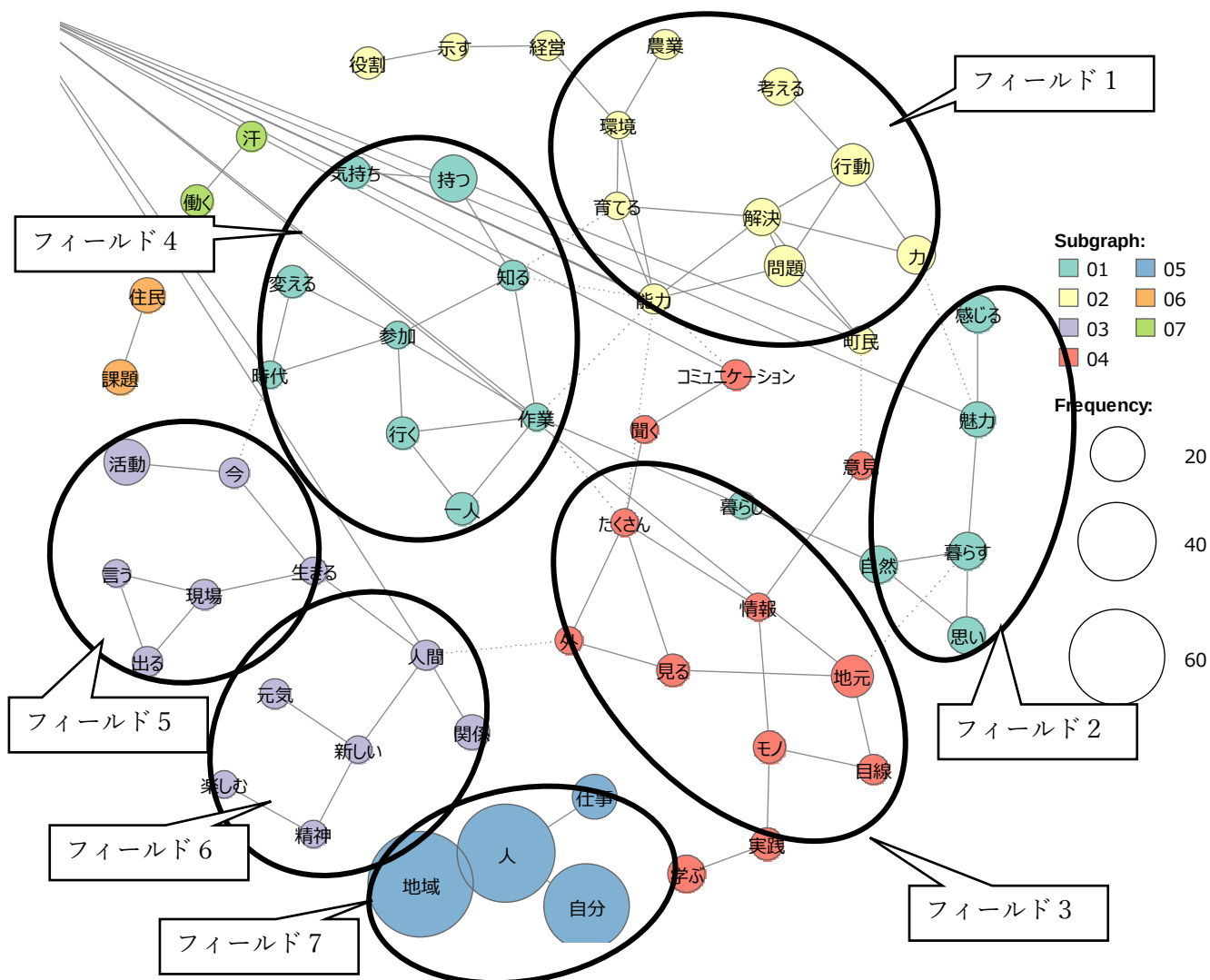
具体的な方法として、まず第一に地域で活躍する人物について書かれた文献を職員で分担して読み込み、文献の中に見られる人物の行動特性や考え方の特徴などを想起させる文章、単語を拾い集め、「用語の出現頻度」や「用語同士の関係性」をテキストマイニングの手法を用いて分類、整理し、そこから地域で活躍する人材が持っているであろうと思われる資質・能力を仮説として設定する。

テキストマイニングに使用したソフトは「KH Coder」である。これはテキスト型（文章型）データを統計的に分析するためのフリーソフトウェアで、「アンケートの自由記述・インタビュー記録・新聞記事など、さまざまな社会調査データを分析するために制作」されたものであり、「計量テキスト分析」または「テキストマイニング」と呼ばれる方法に対応している。読み込んだ資料については以下に掲載する。

- ・椎川忍・小田切徳美・平井太郎・一般財団法人地域活性化センター・一般財団法人移住・交流推進機構『地域起こし協力隊 日本を元気にする 60 人の挑戦』学芸出版社（2015）
- ・関満博『地域産業振興の人材育成塾』新評社（2007）
- ・辻哲夫監修・田城孝雄・内田要編『まちづくりとしての地域包括ケアシステム 持続可能な地域共生社会をめざして』東京大学出版会（2017 年）
- ・猪谷千香『町の未来をこの手でつくる 志波町オガールプロジェクト』幻冬舎（2016 年）
- ・桑子敏雄『わがまち再生プロジェクト』角川書店（2016 年）
- ・信田和宏『「いなか」おこし！ 地域ブランド戦略を創る』NTT 出版（2010 年）
- ・樋田大二郎 樋田有一郎『人口減少社会と高校魅力化プロジェクト 地域人材育成の教育社会学』明石書店（2018 年）
- ・笠松 和市、佐藤 由美『持続可能なまちは小さく、美しい 上勝町の挑戦』学芸出版社（2008 年）
- ・志子田徹『ルポ 地域再生 なぜヨーロッパのまちは元気なのか？』イースト新書（2018）
- ・水柿台地『21 歳男子、過疎の山村にすむことにしました』岩波書店（2014 年）
- ・高野誠鮮『ローマ法王に米を食べさせた男 過疎の村を救ったスーパー校務員は何をしたか？』講談社（2012 年）
- ・山崎亮『ふるさとを元気にする仕事』筑摩書房（2015 年）
- ・市来広一郎『熱海の奇跡 いかにして活気を取り戻したのか』東洋経済新報社（2018 年）

KH コーダーを使用して、テキストマイニングを行い、それぞれの用語がどのような文脈や関係性の中で使用されているかを「共起ネットワーク」図にして読み取り、そこから資質・能力についてのカテゴリーを作成した。（下図参照）

評価開発グループ内での読み取り結果、「共起ネットワーク」図からは大きく 7 つのカテゴリーが把握された。それらを「フィールド」と名付け、フィールドごとに定義を作成した。例えばフィールド 1 では、「問題」「解決」「行動」という用語を中心にフィールドが形成されており、ここから「問題解決するために行動する」という資質・能力を定義として作成した。以下に、作成した 7 つのフィールドの定義を載せる。



- フィールド 1 「問題解決のために行動する」
- フィールド 2 「地域での暮らしに魅力を感じる」
- フィールド 3 「地元の情報を地元目線で集める」
- フィールド 4 「自分 1 人でも時代を変えられる力を持つと思う」
- フィールド 5 「現場主義」
- フィールド 6 「新しい人間関係を楽しむ」
- フィールド 7 「自分事として地域の人と仕事する」

次に、これらのフィールドを軸に、その資質・能力を尋ねる形の質問を作成し、アンケートの体裁とした。(p119～p122) アンケートは7つの各フィールド3問作成し、計 21 問とした。尋ねるに際しては、これらの質問それぞれを「今の自分について回答してもらう」のに加え、「過去（高校生ぐらいの年代を想定）の自分について思い出して回答してもらう」の 2 パターンで回答を求めた。

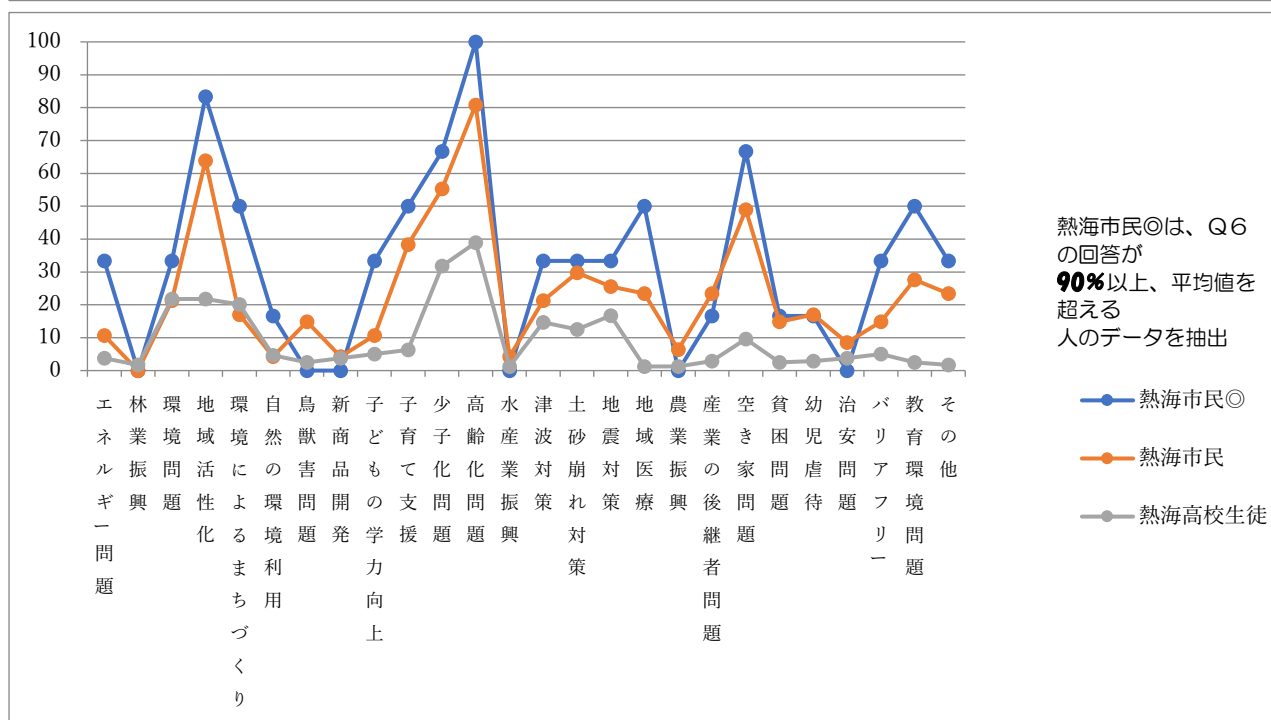
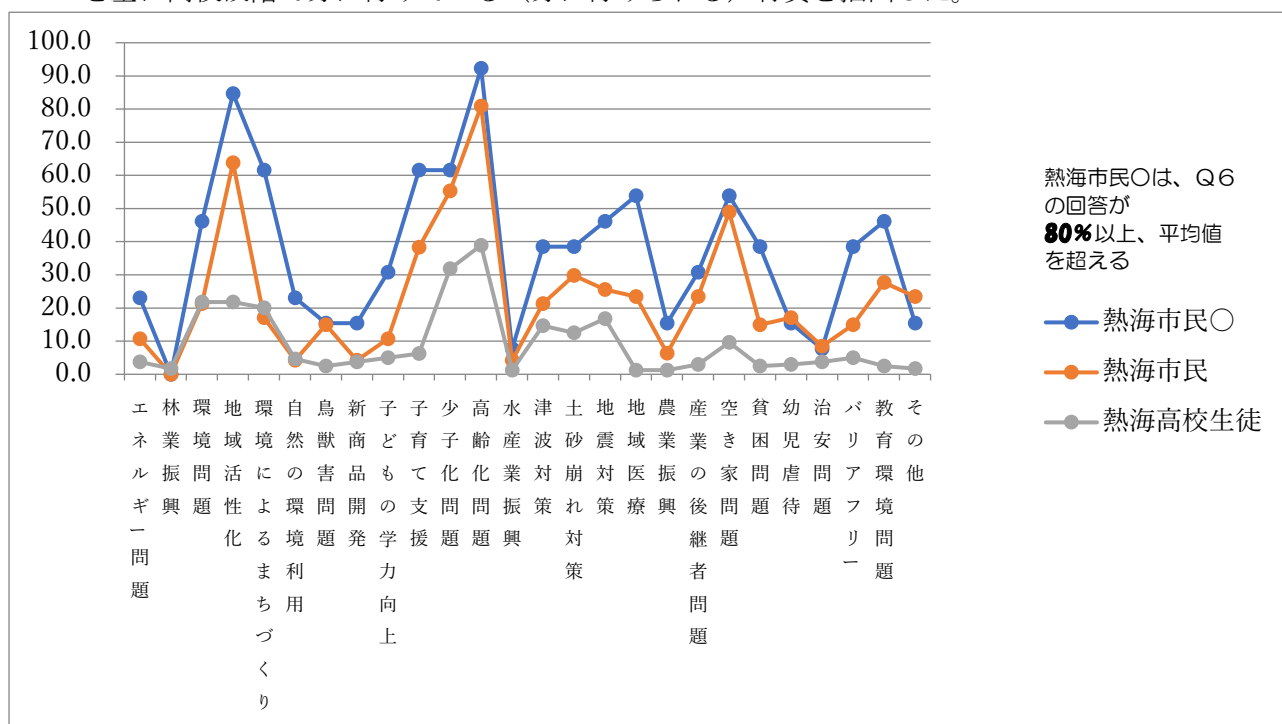
アンケートは地域で活躍する人材に回答を求めた。ここでは、「公的な活動に従事していること」「地域のために奉仕する要素を持っていること」を地域で活躍すると仮定し、以下の職業・業務に就いている人に配布し、回答への協力を求めた。

◆アンケートの実施対象者◆

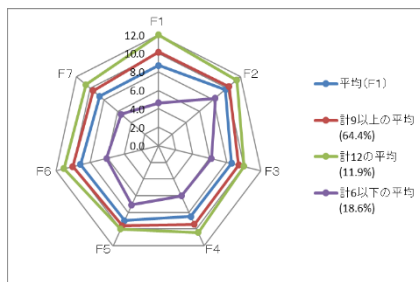
- 熱海市議会議員（15名） ●熱海市内町内会長（90名）
- 熱海市民生、児童委員（20名） ●「熱海ラボ」関係の企業担当者（8名）
- 熱海商工会議所の理事、職員（5名） 計138名
- 熱海高校生（比較のため） ●熱海高校職員

比較対象として熱海高校生及び熱海高校教員（30名）にも同様のアンケートを実施した。

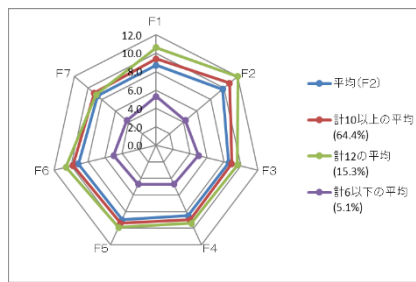
合計59枚のアンケートを回収した（回収率43.5%）。集計をレーダーチャートや折れ線グラフなどにまとめ（下図参照）、「現在地域で活躍している人が持つ資質」と、「その人が以前から持っていたと思われる資質」と、「社会に出てから得た資質」に分けて把握し、それを基に高校段階で身に付けている（身に付けられる）特質を抽出した。



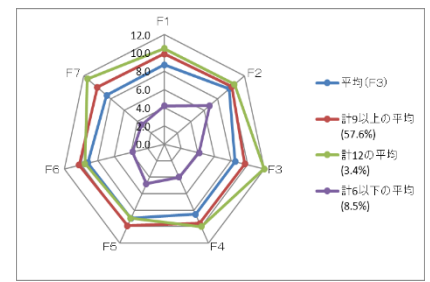
◆レーダーチャートによるフィールド毎の分析



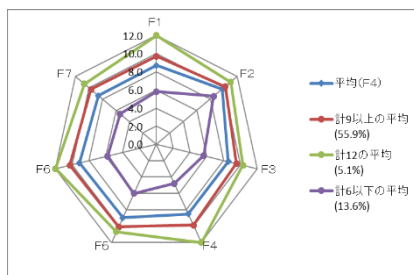
★フィールド1「問題解決のために行動する」



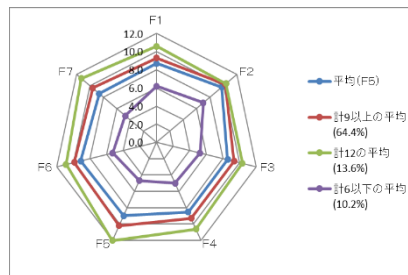
★フィールド2「地元での暮らしに魅力を感じる」



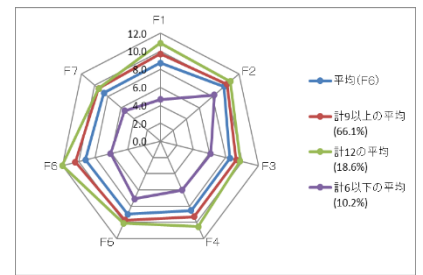
★フィールド3「地元の情報を地元目線で集める」



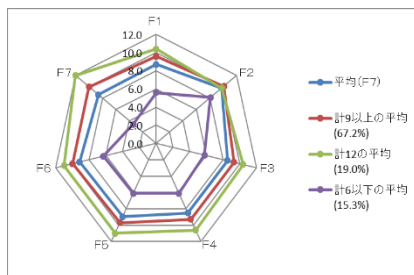
★フィールド4「自分一人でも時代を変えられる力を持つと思う」



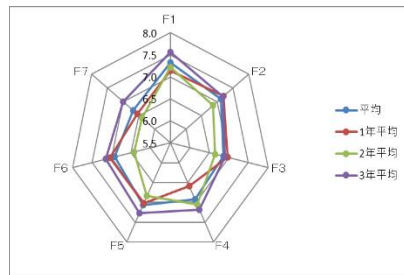
★フィールド5「現場主義」



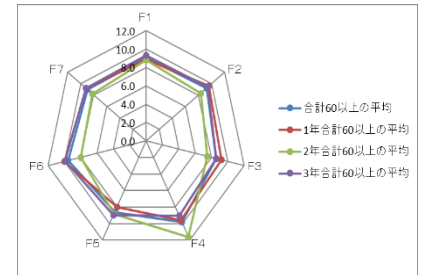
★フィールド6「新しい人間関係を楽しむ」



★フィールド7「自分事として地域の人と仕事する」



◎熱海高校生徒：平均（学年別）



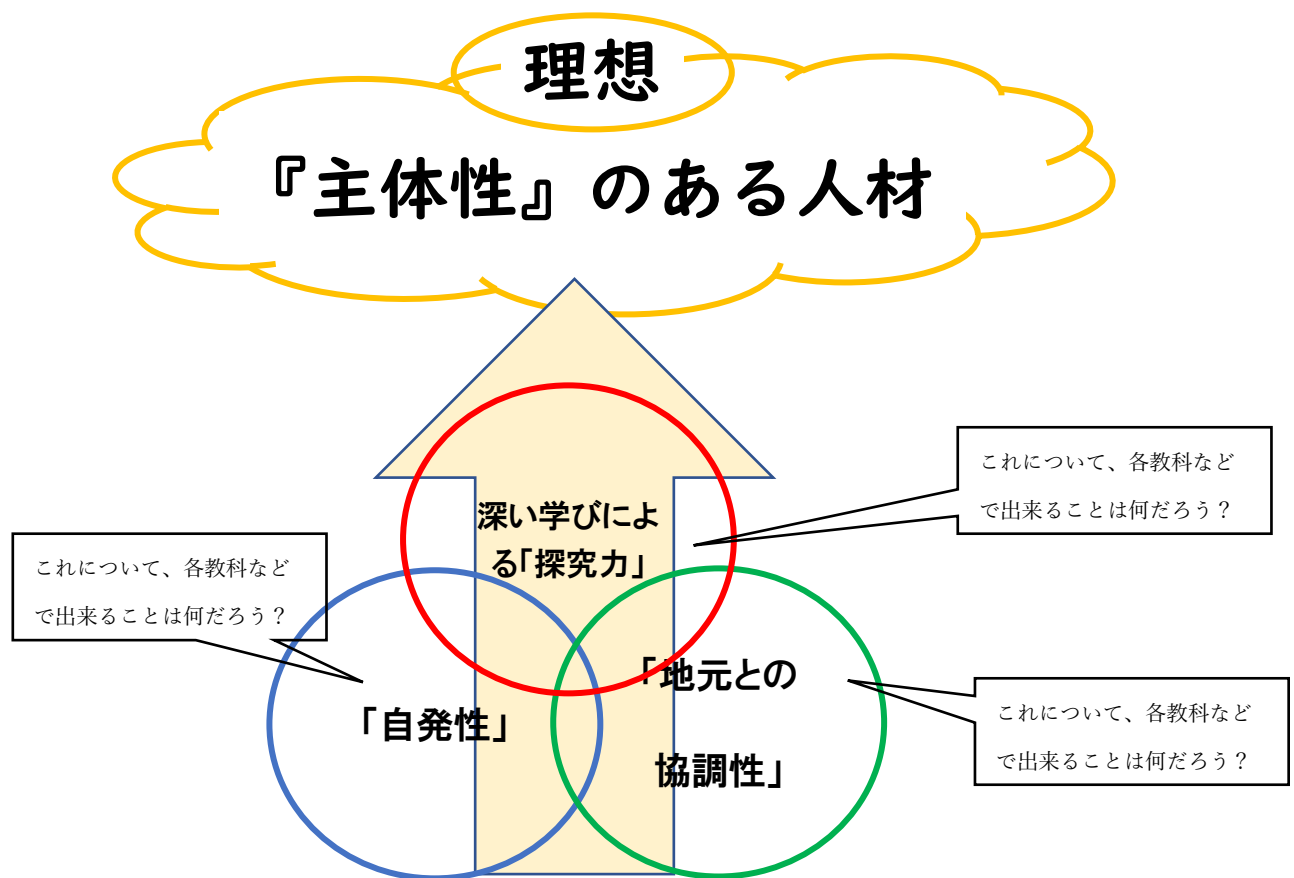
◎熱海高校生徒：合計60以上の平均（学年別）

③ アンケート結果から読み取れたこと

- ・折れ線グラフの熱海市民と熱海高校生を比べると、問題意識を持っている項目の全体的な傾向はほとんど変わらない。
- ・「新商品開発」「地震対策」「少子化問題」「高齢化問題」など、学校での授業などで扱ったことのある項目は、熱海市民ほどではないが熱海高校生も課題と感じている。これから、授業として取り組むことは高校生の課題意識に対し十分意味があると言える。
- ・折れ線グラフより、熱海高校生は全体的に課題意識の度合いが低い。よって、「課題を認識し、問いを立てる」こと、そのものにもっと重点を置くべきではないか。
- ・アンケート設問6-4「海や山などの自然に囲まれた生活を愛している」は、昔の高校生よりも今の高校生のほうが肯定的な意見が多かった。このことから、今の高校生のほうが昔より熱海の事を知っており、土地を利用して学ぶことを生かした授業を盛り込みたい。
- ・レーダーチャートのF4「自分一人でも時代を変えられる力を持つ」が高い人は、F1「問題解決のために行動する」とF6「新しい人間関係を楽しむ」も高い（逆は成り立っていない）という結果になり、これは、他のフィールドには見られない特質で興味深い。

- ・レーダーチャートのF2「地元での暮らしに魅力を感じている」が高い人はF7「自分事として地域の人と仕事する」が低い。これから、『自分の地元が好きだからといって、自分事として動くわけではない』ということが言える。そのため、自分事として動けるトレーニングが必要だと感じた。
- ・熱海高校生の分析を見ると、F1の「問題解決のために行動する」とF4「自分一人でも時代を変えられる力を持つ」は学年が上がるにつれて高まっているため、本校で育てられる力だと認識した。しかし、F2「地元での暮らしに魅力を感じる」とF3「地元情報を地元目線で集める」は3学年とも変化が見られないため、現状の熱海高校では育てられていない資質と思われる。

④ 地域側からの視点と学校の目指す人物像を整合させるためのシラバス作成



これら①～③を総括してみると、**学校の目指す「主体性のある人間」＝「課題や問いを見出し、解決していくことのできる人材の育成」**だという結論に至った。そのための具体的な表れに、「探究力」「自発性」「協調性」の3つがあり、教員や地域が高校生に求めているものなのだと思う。

学校でできる具体的な方策は、1年生の総合学習「熱高ラボ」で問いを立てるトレーニングをして、2年生の総合学習「熱海ラボ」でも問いを立て、それを今度は深く考える。その力を各教科が授業内でも育てるべきだと感じ、「**各授業で必ず問いを立てる場面を設け、問題解決的な学習を盛り込む**」「**深く考えるトレーニングのため、教科横断的な取組み**

を実施する」という2点を記述したシラバスを来年度に向けて依頼した。

また、課題について考えを深めるため、教科横断的な取組を作るよう意識している。具体的には『教科が求めること（他の教科にやってほしいこと）』と、『教科のほうから提供できること（他の教科にやってあげられること）』の2つを募った。例えば、商業科「2学期に観光案内分を作成したいが、それを英語で作る作業を英語の時間を利用してできないか？」→英語科「英語表現の5月～6月の授業を利用すればできる」や、数学科「2学期に数学の授業で統計を扱い、データの分析を学ぶ。何かに使えないか？」→商業科「熱海の観光客動向を分析する際に使いたい！」などである。こうした教科の枠を超えた関わり合いをすることで深い学びに繋げる狙いがある。

今後取り組むべきこと

- ・今年度新たに作成するシラバスを実際に運用してみて、教科の連携が適しているか確かめる。そのうえで、さらに良い結びつきや教科横断的な取組ができるかを図り、より良いシラバス作りを行う。
- ・評価のルーブリックを完成させる。今年度試験的に作成しているルーブリック（p123）を検討・実践してみて、ルーブリックを改善していく。具体的には、本校の目指す人物像である「自発性」「探究力」「協調性」の3要素を元にした「主体性」のある人材育成のため、学校生活の「どんな場面で」「誰が」「どのような手段で」評価していくのかを明確に分かるようにしたい。その際、多くの地域活躍人材が備えていると思われる「自己有用感」や「自己肯定感」を兼ねて評価することも考えている。
- ・今年度同様、来年度もコンソーシアムを定期的に開催し、コンソーシアム委員の方々が本校高校生に求めるものを参考しながら評価を作り上げていきたい。
- ・探究活動を行う前後に内容が同じアンケートを生徒たちに実施し、探究活動によって生徒たちにどのような変容が見られたかを具体的に探る。また、その結果を参考に評価内容を考える。
- ・「熱海市の人口減少」などの問題提起を記事とした新聞記事を生徒に読ませ、その内容に関する感想を記述させる。それを年度当初と終わりに実施し、探究活動を通してどのような視点が得られるようになったかの変化を探りたい。